

「つま恋」ガス爆発火災の概要

昭和59年12月

掛川市消防本部

は　じ　め　に

死者 14 名、負傷者 28 名を出すという大惨事となった「つま恋」のガス爆発火災から、早くも 1 ケ年が過ぎました。野山の樹々も紅葉を増してようやく秋の気配深まったのかな「つま恋」のお昼どきに、突然起ったガス爆発火災による大惨事は、未だ昨日のことの様に脳裏に焼きついております。

昭和 58 年 11 月 22 日、国では自治体消防 35 周年記念大会が東京の日本武道館において盛大に挙行されておりました。

12 時 48 分頃スポーツランドの中心施設である S. M. C (スポーツマンズクラブ) に隣接して建つレストラン「満水亭」が、突如轟音と共に吹き飛び炎上し、食事中の利用客とサービスの従業員の居た建物は、一瞬にして騒然たる修羅場と化したのであります。

この惨事によって尊い生命を失なわれました 14 柱の方々の御冥福をお祈り申し上げますとともに、御遺族並びに被災者の皆様に対しまして心から御見舞申し上げます。

この事故に際して文字どうり渾身の力を振りしぼって負傷者の救出に挺身され、又懸命に救護や消火活動に尽力されました方々に対し、衷心より敬意と感謝を申し上げます。

私たちはこのいまわしく、恐るべき体験を通じて幾多の教訓を体得しました。

今後は、この教訓を生かして消防力の充実強化と予防行政の推進につとめ、安心立命できる町づくりに邁進する所存であります。

昭和 59 年 12 月

掛川市消防長職務代理者
消防署長 熊 切 章 一

目 次

1. つま恋の概要	1
2. 火災の概要	2
(1) 事故発生の日時及び場所	2
(2) 被災の状況	3
(3) 出火の原因	3
3. 火元建物の概況	4
4. 気象状況	7
5. 爆発火災に至るまでの経過	7
6. 初期消火と通報	10
(1) 初期消火	10
(2) 通報の状況	11
(3) 避難誘導の状況	11
7. 消防隊の活動	11
(1) 経過	11
(2) 活動人員	12
(3) 消防隊の現場到着状況	13
(4) 消火活動	14
8. 地水利の状況	16
(1) 地利	16
(2) 水利	16
9. 救急活動	17
(1) 掛川市消防本部	17
(2) 小笠地区消防組合消防本部	17
(3) 袋井市外2町消防組合消防本部	18
(4) つま恋	19
10. 医療機関の活動	21
(1) 掛川市立総合病院	21

(2) 北 原 医 院	22
11. 防 火 管 理 等	22
(1) 防 火 管 理 者	22
(2) 消 防 計 画	22
(3) 避 難 訓 練	22
(4) 消防用設備等の状況	23
(5) 消防用設備等の点検報告	23
(6) 表 示 マ ー ク	23
(7) 立入検査と指導	23
12. そ の 他	23
(1) 現 場 本 部	23
(2) 掛川市の対応	23
13. 教 訓 と 対 策	24

1. つま恋の概要

つま恋は我が国で最初の会員制レクリエーション施設といわれ、日本楽器製造㈱の子会社中日本観光㈱が昭和49年5月にオープンしたもので、「つま恋」の名称は「たびねするさよの中山さよ中に鹿ぞ鳴くなる妻や恋しき」と歌った一首が風雅和歌集（1346年 橘為仲朝臣）にあり、これに由来したものであると言われる。

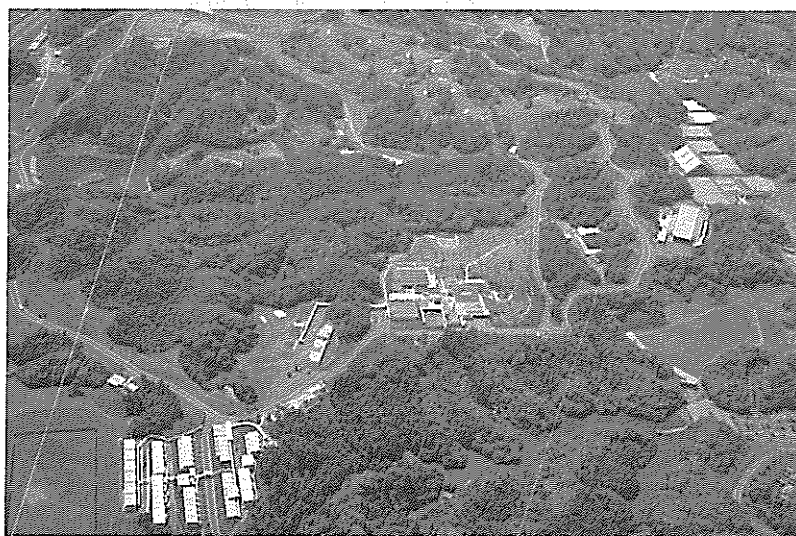
場内は山あり谷有りで、自然の景観をいかしその中にスポーツマンズクラブを中心に次の施設がある。

テニスコート（2ヶ所 35面 うちインドアー3面）

ゴルフショートコース（9ホール、ゴルフ練習場）

アーチェリー（ターゲットアーチェリー、フィールドアーチェリー）

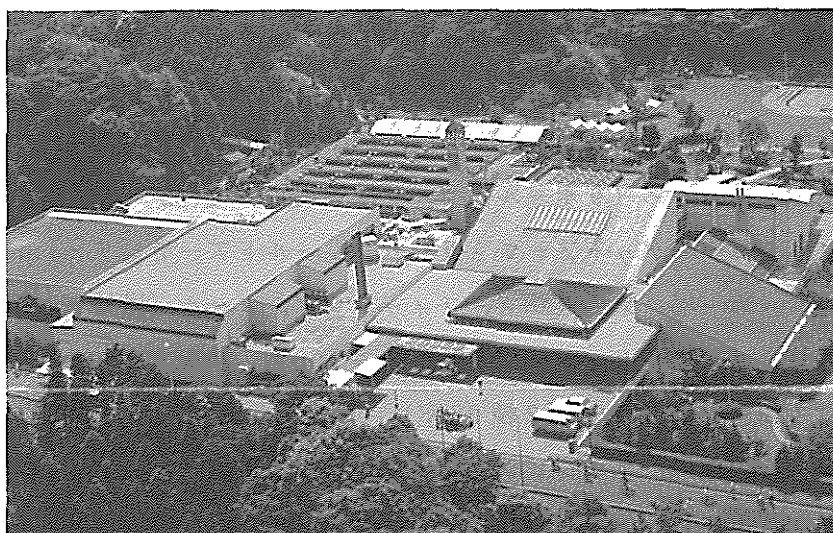
野球場、サッカー場、乗馬クラブ、フィッシング、プール（屋外プール、室内温水プール）、サイクルセンター（ランドカー100台、自転車140台）、サウナ、ロッジ（120室）、ホテル（2棟93室）、屋外ステージ、多目的広場、軽スポーツ広場、その他に、エキジビションホール等がある。



つま恋の全景（事故前）

このエキジビションホールで開かれるつま恋コンサート“ポップコン”は大変に有名であり、又多目的広場の特設ステージで繰り広げられるビッグコンサートには、全国から6万人もの若者達が集り、64,000㎡の広場は人で埋め尽される。

この施設の経営はヤマハレクリエーション㈱「つま恋」で、年間の収客人数は約35万人と言われている。



スポーツマンズクラブの全景（事故前）

2. 火災の概要

(1) 事故発生の日時及び場所

昭和58年11月22日 12時48分頃

静岡県掛川市満水2000番地

ヤマハレクリエーション㈱つま恋内 レストラン「満水亭」
たまりてい

(2) 被災の状況

ア 死傷者の状況

死者 14名（男性 3名、女性 11名）

負傷者 28名（男性 15名、女性 13名）

※負傷者中 1名は消防団員

負傷者の内訳（収容時の診断結果）

重症者 9名（男性 4名、女性 5名）

中等症者 9名（男性 5名、女性 4名）

軽症者 10名（男性 6名、女性 4名）

イ 建物の被害

全 焼 満水亭 1棟 984 m²

鉄 骨 平屋建 カラー鉄板瓦棒ぶき 周囲 ガラス張り
（簡易耐火建築物）

一部損壊 S. M. C 1棟

S. M. C 室内プールのガラス 2方面 全損
カフェテリア、和食堂のガラス 全損
（耐火建築物）

ウ 損害額

(ア) 満水亭

建物（焼失） 95,592千円

収容物 12,068千円

小 計 107,660千円

(イ) S. M. C（スポーツマンズクラブ）

建物（破損） 19,918千円

(ウ) 合 計 127,578千円

(3) 出火の原因

調査中

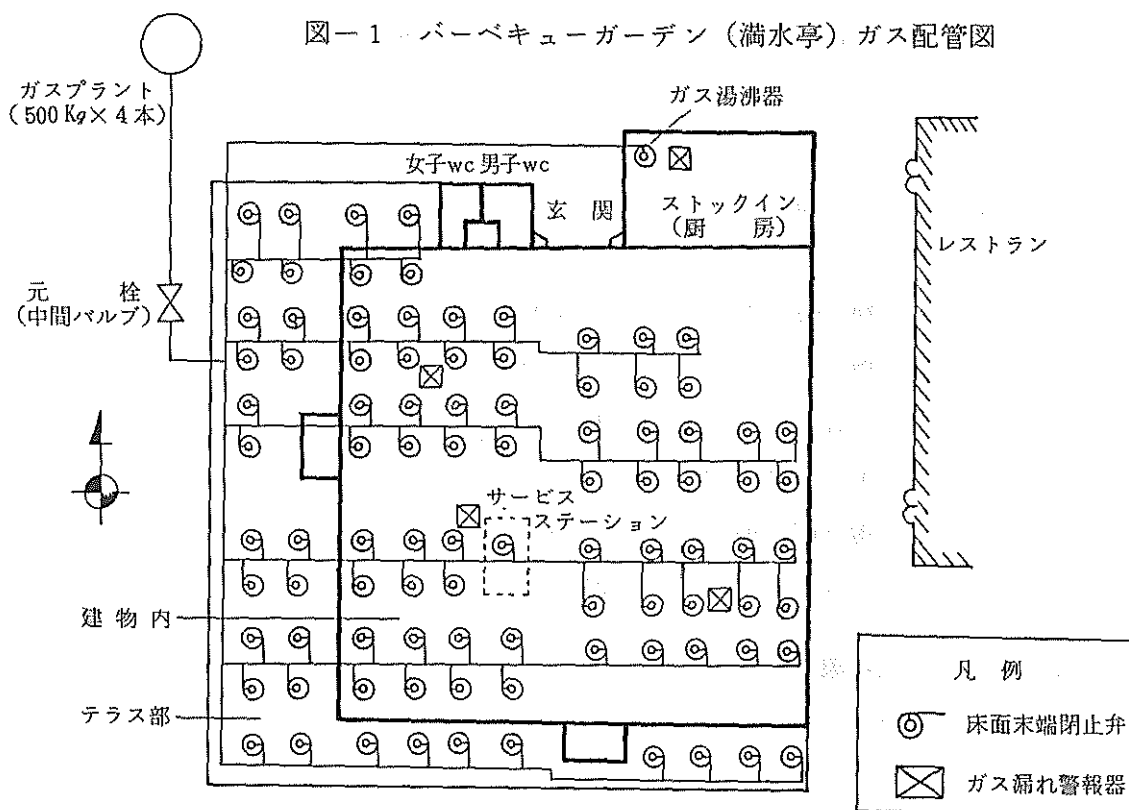
3. 火元建物の概況

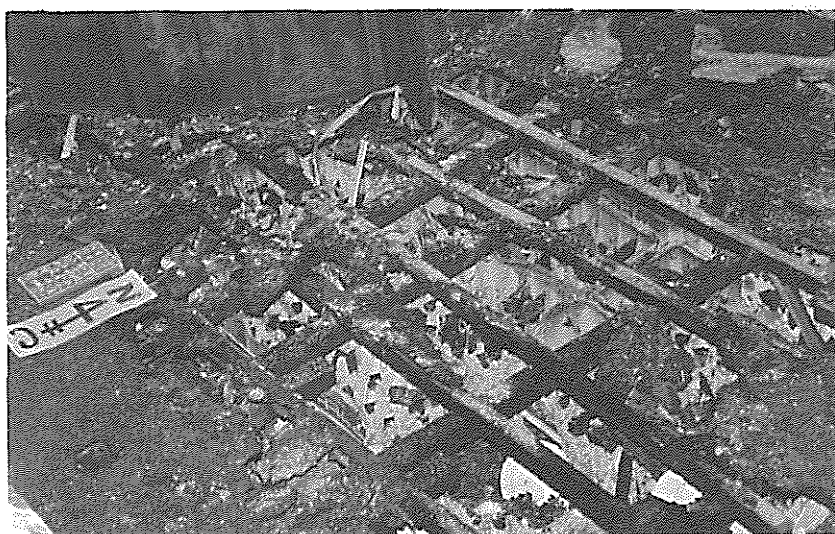
満水亭は、「つま恋」の中心施設 S. M. C (スポーツマンズクラブ) に隣接して設けられた簡易耐火構造で平屋建の建物である。この建物は、夏季はコンクリートの床の上にバーベキュー用テーブルを配置して洋風バーベキューレストランとして営業し、冬季はこのテーブルや椅子を運び出し床にプラスチック製のビールケースを約 3,000 個並べ、その上にコンクリートパネル (合板) を用いて床を作り、約 400 畳の畳を敷きつめて和風レストランに仕立てて営業していた。

満水亭から 140 m 程離れたところに 500 Kg ボンベ 4 本を設置したガス施設 (ガスプラント) があり、満水亭にはそこから地中配管によりガスが供給されていた。

冬季のナベ料理用燃料は、座卓の下にそれぞれプロパンガス 2 Kg ボンベを配置し、これを使用する予定であった。

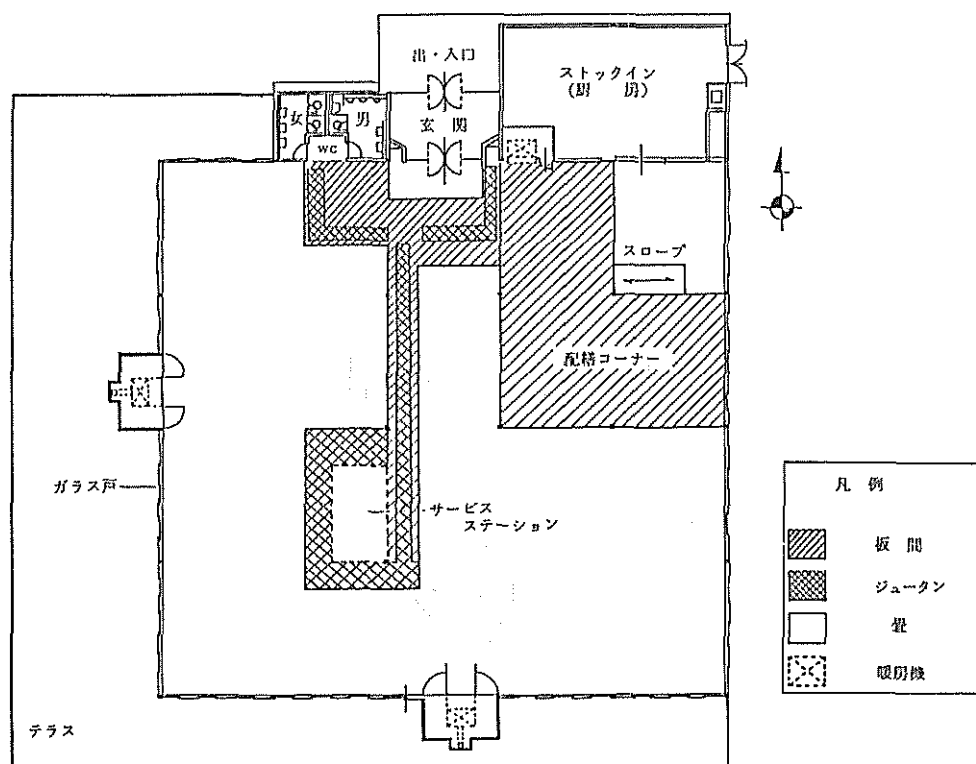
この 2 Kg ガスボンベは室内に 70 個余り有ったが、今回は未だ使用されていなかった。





焼け落ちた床の状況
床下にビールケースが見える

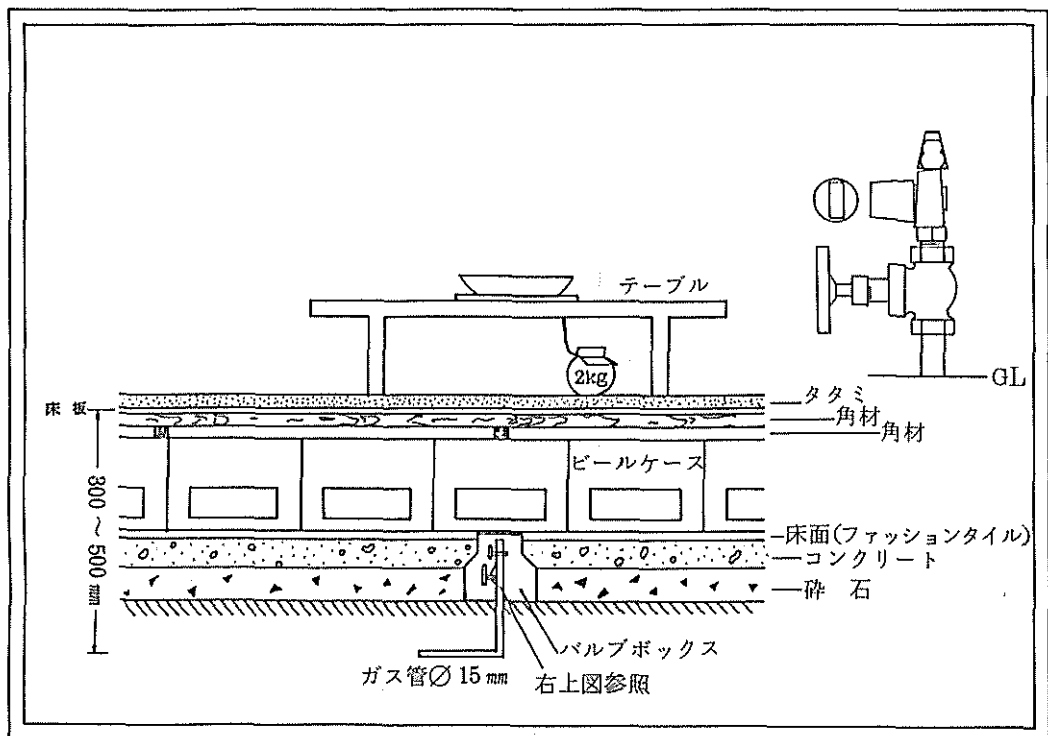
図-2 満水亭平面図





座敷の下に床構造材として並べられたビールケース

図一3 満水亭座敷断面図



4. 気 象 状 況

天 候	晴
風 向	東
風 速	1.3 m/s
湿 度	42 %
温 度	17 ℃

(観測 掛川市消防本部)

火災気象通報発令中 (11 月 17 日)

異常乾燥注意報発令中 (11 月 19 日)

5. 爆発火災に至るまでの経過

バーベキューガーデンから満水亭への改装作業は、バーベキュー用のテーブルと椅子を屋外に運び出すことから始められ、この時にバーベキューコンロと床下のガス配管を結ぶゴムホースの取り外しが行われた。

床下のガス配管にはそれぞれホース取り付け部にバルブとコックがついていたが、従業員の中にはこのバルブとコックを閉めないままゴムホースを取り外した者がいた事がうかがえる。

このことは、現場において屋内部分 69 個のうち 29 個に認められた。

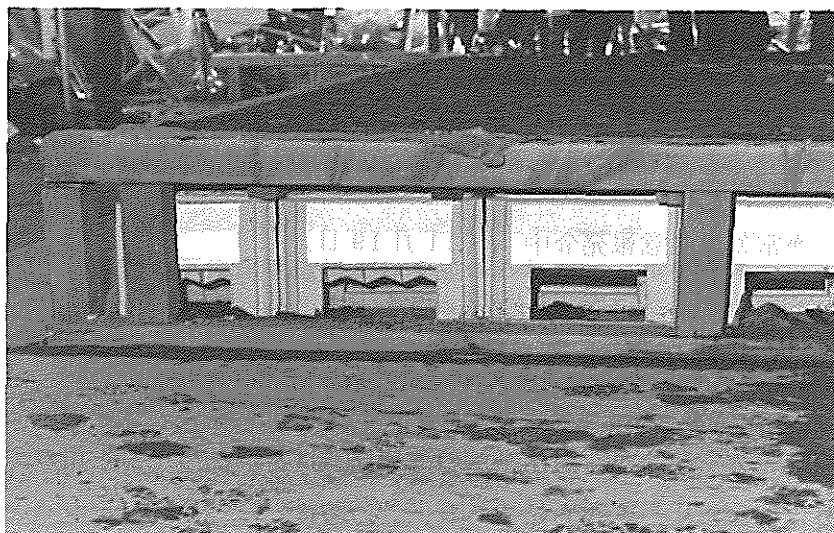
室内に畳を敷きつめ、簡単な内装を行って 11 月 17 日に作業は終了した。

事故当日は、満水亭の厨房では翌日のナベ料理の準備が行なわれ、12時過ぎに、瞬間湯沸器を使うために満水亭の西側の位置に設置してあるガスの元栓（中間バルブ）を調理係が開けた。

満水亭のガス配管は、床下に埋設されており、バーベキュー用も厨房の瞬間湯沸用も同一の配管であった。この配管の元栓（中間バルブ）は 1ヶ所しかなかったの
で、このバルブを開けたことにより、同時に満水亭の床下にガスが漏れ始めること
になった。

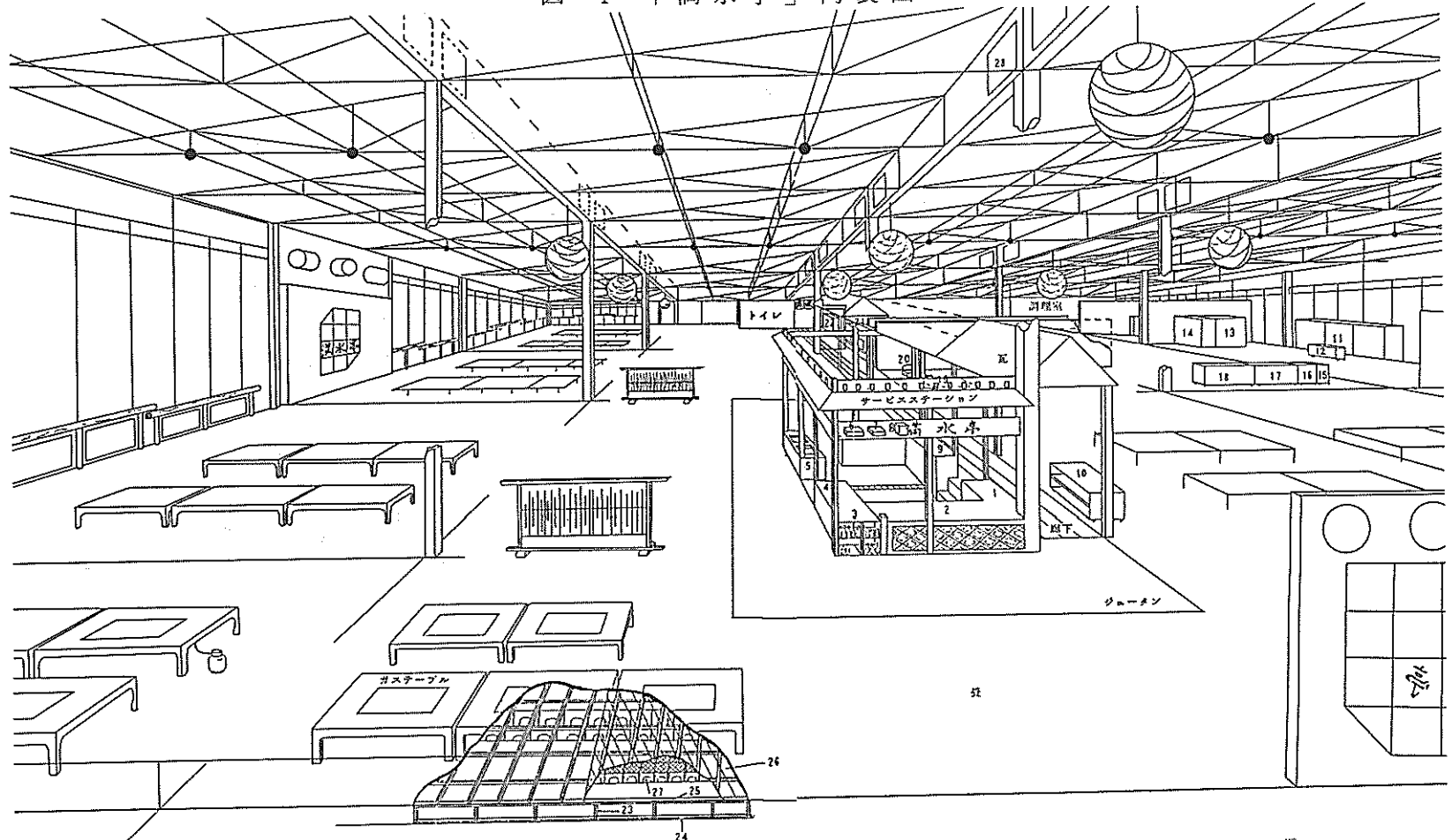
設備係は、満水亭の警報ブザーが吹鳴して警報灯が点灯したが、この時これを誤報と速断したため直ちに現場に行くことなく、更に平常の業務を続けていた。

その後、再び警報ブザーが吹鳴したため急いで満水亭に出向き、中央部のサービスステーションにおいて2Kgのプロパンガスボンベを点検中に大爆発が起り炎上した。



ファッションタイルの床にビールケースを並べて座敷
が作られた

図-4 「満水亭」内装図



- | | | | | | | | | |
|-------------------|----------|---------|-------------------|------------------------|-------------------------|--------------|--------------------|------------|
| 1. 作業台
(下に製氷機) | 4. 冷蔵庫 | 7. おでん鍋 | 10. ワゴン
(ジュース) | 13. 作業台ワゴン
(コーヒー) | 16. 作業台ワゴン
(朝食プレート用) | 19. サラダバーワゴン | 22. キャッシュ
カウンター | 25. 櫃 |
| 2. 作業台 | 5. 2槽流し台 | 8. かん付器 | 11. 下げ物カウンター | 14. 作業台ワゴン | 17. 料理用デシヤップ | 20. 八角デシヤップ | 23. 床づか | 26. ペニヤ板 |
| 3. 冷蔵庫 | 6. おでん鍋 | 9. 作業台 | 12. 下げ棚用ワゴン | 15. 作業台ワゴン
(朝食トレイ用) | 18. 水 台 | 21. ショーケース | 24. 土 台 | 27. ビールラック |
| | | | | | | | | 28. 換気扇 |

6. 初期消火と通報

(1) 初期消火

ガス爆発の起こった時屋内に居た人の証言によれば、「爆発で一瞬気を失い、気が付くと建物は吹き飛び、中央附近に大きな火の手が上がっていた。」と言っており、床下の構造とプロパンガスの漏れ量からみて爆発後の火災は瞬間的に拡大し、且つ室内には2Kgガスボンベが70本余りが有ったことから、急速に広範で強力な火勢になったものと推定される。

爆発の直後消火器を持って駆け付けた人の証言によれば、「火勢がすさまじく、なす術が無かった。」と言っていることから、初期消火活動の効果は得られなかった。

なお、従業員による初期消火活動に使用された消火器は40本余りで、水バケツによる消火作業の従事者は10数名、消防ポンプ自動車での消火活動には10名余りが従事した。



消防団員の残火処理が続く。

(2) 通 報 の 状 況

消防本部の通信室へは次のような通報が矢継早に続いた。

第1報

11月22日（火）12時50分

つま恋ゲートより男性の声で

「S. M. Cでガス爆発があったらしい、詳細不明」

第2報 S. M. C フロントより男性の声で

「S. M. Cでガス爆発、火災、怪我人多数」

第3報 つま恋従業員女性の声で

「ガス爆発、救急車を頼む」

第4報 女性の声で

「火事になっているので消防車も頼む」

第5報 男性の声で

「救急車も沢山頼む」

(3) 避難誘導の状況

室内でガス臭を感じた従業員は、ガス漏れ箇所を調査したり、ガス漏れの状況を上司に報告しただけで、利用客に対する避難誘導を行なわなかった。

7. 消 防 隊 の 活 動

(1) 経 過

ア 覚 知	11月22日	12時50分
イ 覚知方法		119番
ウ 出 場		12時50分
エ 現着（救急先着隊）		13時00分
	（消防先着隊）	13時01分
オ 火勢鎮圧		13時30分
カ 鎮 火		13時55分

(2) 活 動 人 員

ア 掛川市消防本部

水槽付消防ポンプ自動車（水 1.5 t）	2 台 （内非番 1 台）	8 名 （内非番 3 名）
小型動力ポンプ付水槽車（水 10 t）	1 台	2 名
救 急 自 動 車（Ⅱ ー B）	2 台	6 名
指 揮 車（ライトバン）	1 台	2 名
査 察 車（ライトバン）	2 台	5 名
駆 け 付 け（自家用車）		6 名（現場）
小 計	8 台	29 名
通信室勤務者		2 名
庁内勤務者（非番員 2 名、女子職員 1 名）		3 名
計	8 台	34 名

イ 掛川市消防団

水槽付消防ポンプ自動車（水 1.5 t）	1 台	16 名
普通ポンプ自動車	9 台	128 名
分 団 長 等		5 名
計	10 台	149 名

ウ 小笠地区消防組合消防本部

救 急 自 動 車（Ⅱ ー B）	1 台	3 名
連 絡 車（ライトバン）	1 台	2 名
計	2 台	5 名

エ 袋井市外 2 町消防組合消防本部

救 急 自 動 車（Ⅱ ー B）	1 台	3 名
指 令 車	1 台	3 名
計	2 台	6 名

オ 磐田市外 4 町村消防組合磐田消防本部及び浜松市消防本部

両消防本部では、最寄りの救急隊の派遣態勢を整えて事態の推移を見守るも出動には至らなかった。

カ 総 出 動 人 員

掛川市消防本部	34 名	小笠地区消防組合消防本部	5 名
掛川市消防団	149 名	袋井市外2町消防組合消防本部	6 名
計			194 名

キ つま恋自衛消防隊

パトロールカー（カラーラバン）	1 台	2 名
救 急 車（ライトエース）	1 台	2 名
マイクロバス（コースター）	1 台	2 名
その他の業務用車両（カラーラバン）	2 台	2 名
（ハイエース）	3 台	4 名
（トラック）	1 台	1 名
小 計	9 台	13 名
普通消防ポンプ自動車	1 台	1 名
計	10 台	14 名

※ポンプ自動車の出動は1名、操作時は10余名。

(3) 消防隊の現場到着状況

車 両 別	出 動	現 着
消防ポンプ自動車（つま恋自衛消防隊）	12：49頃	
救 急 車（1号車 掛川消防）	12：50	13：00
水槽付消防ポンプ自動車（3号車 掛川消防）	12：50	13：01
小型動力ポンプ付水槽車（4号車 掛川消防）	12：50	13：01
救 急 車（2号車 掛川消防）	12：50	13：01
指 揮 車（一 掛川消防）	12：50	13：01
査 察 車（2号車 掛川消防）	12：50	13：01
水槽付消防ポンプ自動車（1号車 掛川消防 〔非番員〕）	12：54	13：03
救 急 車（小笠消防）	13：00	13：06
査 察 車（1号車 掛川消防 〔非番員〕）	13：02	13：07
救 急 車（袋井消防）	12：58	13：21

(4) 消 火 活 動

ア 掛川市消防本部

水槽付消防ポンプ自動車（3号車）に小型動力ポンプ付水槽車（4号車）が後続して急行しS. M. Cに至り、火点南東側に部署して3号車は第1線を以って火掛け、4号車は第1線を3号車へ中継し、第2線で火点南側へ火掛けして消火活動を行った。

続いて消防隊は3号車の小型動力ポンプを中庭に搬入、泉水を利用して防ぎょ態勢の強化を図った。

後続の水槽付消防ポンプ自動車（1号車）は非番員によって編成し、つま恋に入り現場北側芝生の庭園（なだらかな丘陵）から進入して火点西側方面へ火掛けをした。

イ 掛川市消防団

消防団は、サイレンの吹鳴と放送により10隊の出動が行なわれた。遂次到着した消防隊はS. M. Cを包囲し、火点北側の池、S. M. C前消火栓、北西低地の飛び込みプール及び室内プールに部署して4線が火掛け、1線を消防署の水槽付消防ポンプ自動車（1号車）へ中継送水し、又1線を中庭泉水へ送水して前面火掛りの部隊を支援、更に搭載の小型動力ポンプを室内プールに部署して水槽付消防ポンプ自動車へ中継するなどの活動を行い、その展開は火災防御図に示すとおりである。

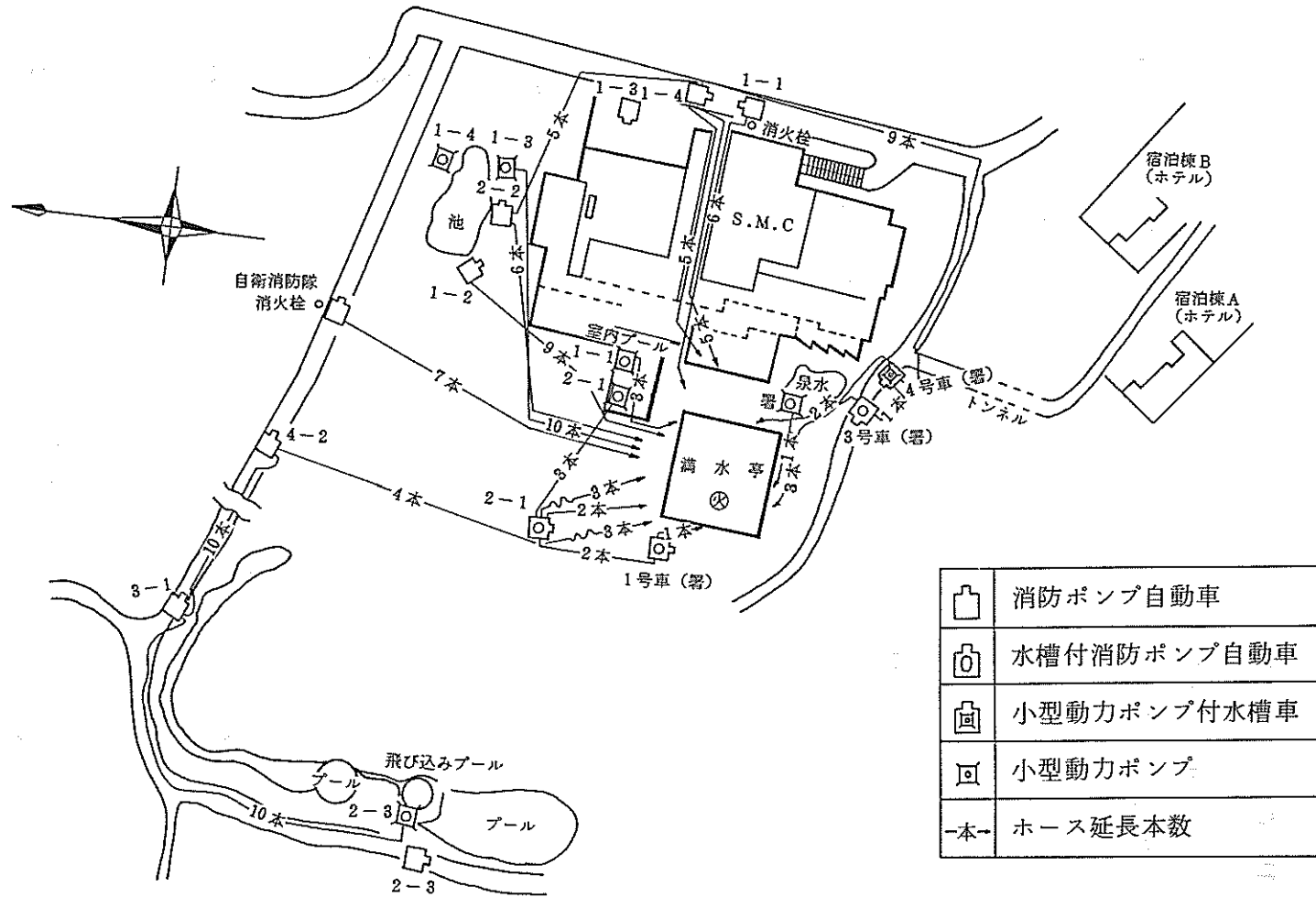
ウ つま恋自衛消防隊

緊急事態を察知したゲートの警備係は、単身消防ポンプ自動車を運転してS. M. Cへ急行し、火点北方の坂路をのぼり、道路ぎわの消火栓に部署して駆け付けた人達と共にホース7本を延長して消火活動を行った。

又、従業員などは、S. M. Cをはじめ場内の各施設から消火器を持って駆け付け消火作業を行ったが、火勢が強く全く効果がなかった。

当日場内の各施設に合せて120名程の従業員が居り、事故に際しては4分の1の30名が自衛消防隊として行動し、他の者は救急救護、資材の運搬或いは関係各方面への連絡業務に従事した。

図-5 火 災 防 御 図



8. 地 水 利 の 状 況

(1) 地 利

掛川市市街地の中心部から約 3 Km 東方で、菊川町に接した丘陵を切り拓き、その自然の起伏を活して設けられたレクリエーション施設で、面積は 170 万 m^2 である。

場内に点在する各種の施設が舗装された道路によって結ばれており、交通の便は良好であるが、消防活動上の難点とすれば場内に起伏のあることである。

(2) 水 利

場内の消防水利状況としては、私設の水道管（直径 150 ～ 200 ミリ）に全部で 11 基の消火栓が設置され、この火災で使用された消火栓は 2 基で、つま恋自衛消防隊及び消防団の 1 隊が使用した。

火元建物付近には屋外プール（655 m^2 ）、室内プール（216 m^2 ）があり自然水利は池（150 m^2 ）、中庭泉水（16 m^3 ）があつて施設内では比較的水利のある区域である。

投入された消防自動車の積載水は、小型動力ポンプ付水槽車に 10 t、水槽付ポンプ自動車 3 台に何れも 1.5 t を持ち、合せて 14.5 t が速消活動に用いられた。



屋根上の状況——東側建物の屋根には雪状にガラスの破片が積っている。

9. 救 急 活 動

通信室では、通報内容から大きな被害が推定されたので、消防隊及び救急隊の現場到着前に袋井市外2町消防組合消防本部及び小笠地区消防組合消防本部に対して無線により救急車の応援出動を要請した。

同時に、掛川市立総合病院へ負傷者多数の受け入れを要請し、続いて市内開業医の北原医院へも、市立総合病院の収容能力を超えた場合の受け入れを要請した。

(1) 掛川市消防本部

119番のガス爆発発生、怪我人多数ありとの通報により保有する救急車2台と指揮車（ライトバン）1台、査察車（ライトバン）1台の計4台が、水槽付ポンプ自動車1台、小型動力ポンプ付水槽車1台と共に出動し、更に水槽付消防ポンプ自動車1台が続いて出動した。消防本部から現地までの距離は7km余りあるが、第1救急隊は約10分で現着し、第2救急隊は約1分遅れて現着した。

この後査察車（ライトバン）1台が現地に向かった。

先行の第1救急隊は、火点東方のS.M.Cサービスヤード地階に進入して従業員によって運ばれて来た負傷者3名を収容し市立総合病院へ搬送した。そして反転して再び現場に急行し、火点南東三叉路において2名を収容して市立総合病院へ搬送した。その後更に現地へ引き返して待機した。

第2救急隊は、南方向から進入して火点北西側において負傷者3名を従業員等の協力を得て収容し、隊員1名を現地に残留させ市立総合病院へ搬送した。この救急隊は予防係2名警防係1名の日勤者によって急拠編成されたが、かつて救急隊長或いは隊員の経験者で幸いした。

同時に、現地に入った指揮車（ライトバン）もこの地点で負傷者1名を収容して市立総合病院へ搬送した。

(2) 小笠地区消防組合消防本部

救急応援要請を受けた同本部は、直ちに救急隊1隊を出動させた。つま恋に入った救急隊は、S.M.C火点北側から庭園芝生上を進入し消火活動中の掛川消防1号車後方に至り、負傷者2名を収容して市立総合病院に搬送し、引き返し現



500 Kgボンベ4本のガスプラントから
プロパンガスが供給されていた。

場において待機した。

同消防本部では予防係長、警防係の2名を急派して現場指揮本部との連絡に
当たった。

(3) 袋井市外2町消防組合消防本部

救急の応援要請を受けた同本部では、直ちに救急隊1隊を出動させた。

この救急隊現着時には負傷者の収容が一段落の状況であったため、火点東の三
叉路附近において待機した。

救急隊に次いで、予防警防両係長及び警防係員の3名を派遣して現場指揮本
部との連絡に当たった。

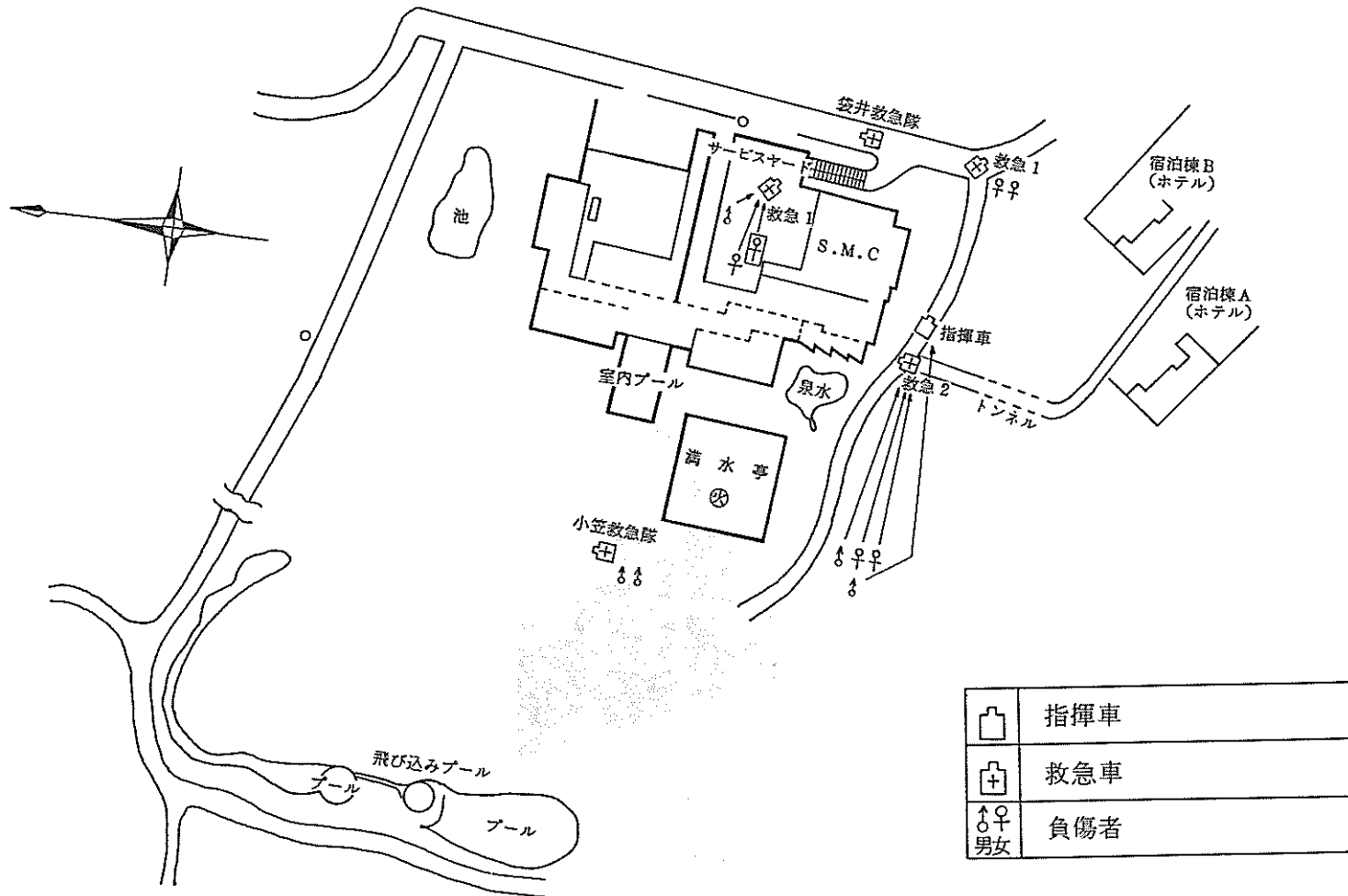
(4) つ ま 恋

「つま恋」では、負傷者が多数発生したので場内に居た従業員等を総動員し、多数の業務用車両や出入業者の車両等を投入して、負傷者の救護や搬送に当たった。



煙りを上げる「つま恋」
掛川市役所から撮影

図-6 救 急 活 動 図



10. 医療機関の活動

(1) 掛川市立総合病院

旧市立総合病院の現有する一般病床は 304 床であり、当日の入院患者数は 281 人、空床は 23 床という状況であった。

事故の発生は昼食時で、外来患者が減り始めた時間帯であった。

消防本部からの「つま恋でガス爆発発生、負傷者多数の見込み。」という通報と負傷者受け入れの要請により、病院は次の対策を樹てた。

対 策

ア 病院長不在につき副院長総指揮を執る

イ 診療中の外来内科診療及び手術の予定を中止

ウ 院内の全医師 26 名及び看護婦 40 名に待機を指令

エ ストレッチャー 10 台を玄関に配置

オ ミドリ十字へ血液の搬入を依頼

カ 医薬用材料のチェックを実施

13 時 10 分頃から 50 分頃迄の間に救急車 3 台、指揮車 1 台、つま恋のワゴン車等が次々と到着した。

総指揮者である副院長（整形外科）は玄関ホールにおいて怪我の状況を分別し、各医師に手当を指示して円滑な収容を行った。

負傷者を全医師が分担して全科の空床へ分散収容した。なお、当時の負傷者の状況は次のとおりであった。

重 篤 5 名（うち 1 名は浜松医大へ転送、1 名は収容後死亡）

重 傷 4 名

軽 傷 14 名（うち帰宅者は 4 名）

計 23 名

※ 当日手術を行ったのは前頭部陥没者の 1 名であった。

(2) 北 原 医 院

北原医院は消防本部の南方で市内中心部の仁藤町にあり、診療科目は内科、小児科、外科の３科で当時は入院施設のない医院であった。

消防本部から北原医院に対して「つま恋でガス爆発発生、負傷者多数、市立病院が収容しきれない時はお願いします。」と要請したので、北原医院では医師２名、看護婦３名、事務員２名の計７名が待機し、その後つま恋のマイクロバスで搬送された負傷者５名の手当を行った。なお、この負傷者は何れも即日帰宅することが出来た。

11. 防 火 管 理 等

(1) 防 火 管 理 者

ヤマハレクリエーション係「つま恋」

施設課長 男 性 37才

選任年月日 昭和55年12月18日

(2) 消 防 計 画

昭和49年 6月11日 届出受理

昭和55年12月18日 変更届出受理

(3) 避 難 訓 練

昭和57年 9月 1日

昭和57年12月14日 消防職員指導実施

昭和58年 3月20日

昭和58年 9月 1日 (防災の日)

(4) 消防用設備等の状況

ア 消 火 器 イ 自動火災報知設備 ウ 誘 導 灯
エ 非常放送設備

(5) 消防用設備等の点検報告

昭和58年3月9日 届 出 受 理
昭和58年6月28日～30日 3日間 総合点検を実施

(6) 表 示 マ ー ク

交 付 昭和56年12月16日 宿泊棟A・Bに交付
昭和58年9月1日 S. M. Cに交付（満水亭を含まず）
返 納 昭和58年12月18日

(7) 立入検査と指導

昭和58年7月8日 S. M. C及び満水亭に立入検査実施

12. そ の 他

(1) 現 場 本 部

掛川市消防本部は、当日火点北西側の芝生庭園内の1号車部署位置を「現場指揮本部」として行動した。

15時00分同所に「つま恋ガス爆発火災消防現場本部」を開設して以来、28日夜迄の7日間にわたって現地の本部を運営した。

7日間の出勤人員 149名

(2) 掛川市の対応

掛川市は消防本部から「つま恋」においてガス爆発火災発生の通報を受けて、市長以下総務部長、市長公室3名、市民安全課7名、福祉事務所8名の計20

名を現地に派遣した。

又、当夜は市長公室 4 名、総務課 6 名、市民安全課 7 名、福祉事務所 8 名、市民課、保健予防課各 1 名の計 27 名が在庁待機して対応した。

13. 教 訓 と 対 策

ア 今回の爆発火災は、消防機関に対する通報が爆発後であったことから消防隊員の現場活動における危険性は少なかったと考えられるが、ガス漏れ警報器が作動したと同時に消防機関に通報があったと仮定すると、「つま恋」の S. M. C 現場迄の所要時間を考慮すれば、現着して室内の調査が開始されるのは爆発の数分前となり、状況を適確に把握せず、うかつに屋内進入をしていれば消防隊員も被害をまぬがれ得なかったであろう。

ガス漏れ事故の場合、その状況が視覚により捕えられないことから、危険度の判定が困難な場合があるが、まず第一には十分に状況を把握する努力が払われなければならない。

イ 一度に多数の死傷者を出した事故にも拘らず、医療機関が負傷者の受け入れ態勢を円滑に組まれたのは一重に医療機関側の努力によったものであった。予想されている東海地震をはじめ不測の大規模災害発生時における救急活動の貴重な教訓となった。

ウ 今回の事故に際して当消防本部は、隣接の袋井市外 2 町消防組合消防本部及び小笠地区消防組合消防本部に対して無線（県波）を以て救急隊の応援を要請した結果速やかに応援が得られたが、大規模災害を想定した相互応援協定の締結とその訓練の必要を痛感する。

又、救急隊が県波の移動局を開局して行動したことにより、文字どおり救急活動の一体化が図られて円滑に業務を遂行することができた。

エ ガス漏れ事故を防止するための各種機器は、ガス漏れ警報器を除き法令上義務化されていないこともあって設置されていない状況であった。

単純なミスによる事故の発生であったことを考えると、これら機器の設置義務化が望まれる。

掛川市消防本部及び消防団の現勢（当時）

1. 消防本部・消防署

(1) 設 置 年 月 日

昭和 37 年 4 月 1 日

(2) 署 所 の 数

1

(3) 事故当時の状況

消防吏員	41 名	その他の職員（女子）1 名	計	42 名
車 両	水槽付消防ポンプ自動車（水 1.5 t）			2 台
	消 防 ポ ン プ 自 動 車			1 台
	小型動力ポンプ付水槽車（水 10 t）			1 台
	救急自動車			2 台
	その他の車両（指揮車、査察車）			3 台
	計			9 台

(4) 勤 務 の 形 態

警防の当務（当直）は、1 ケ班 10 名編成による三部制勤務としている。

(5) 事故発生時の職員執務状況

ア	日勤専従員（予防要員等（その他の職員…女子 1 含））	6 名
	総員 12 名（内出張者 2 名 入院者 1 名 当務の助勤者 3 名）	
イ	当務員（警防隔勤者）	10 名
	総員 10 名（内休暇者 1 名 義免者 2 名 日勤専従員よりの助勤者 3 名）	
ウ	警防日勤者（前々日の当務員）	4 名

	小 計	20 名
エ 非番者、週休者の応召（駆け付け）		15 名
	合 計	35 名

2. 消 防 団

(1) 組 織

1 団 6 ケ分団 20 部制

(2) 団 員 数

500 名（実員 499 名）

1 ケ部は 21 ～ 33 名編成である。

(3) 消 防 車

消防ポンプ自動車	19 台	
水槽付ポンプ自動車	1 台	計 20 台

(4) 当 日 の 出 動

消防ポンプ自動車	9 台	
水槽付ポンプ自動車	1 台	計 10 台
消 防 団 員		149 名

